

円の価値が下がること

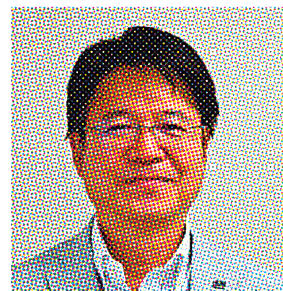
「円安」ってなに？

最近、新聞やテレビで「円安が進んでいる」というニュースをよく聞きます。お金の単位である円が「安い」「高い」とは、どういふことでしょうか。鹿児島県の金融広報アドバイザーで中小企業診断士の二木宏造さん(61)に「円高」「円安」になる仕組みと影響について聞きました。

(肥後美保子)

鹿児島金融広報アドバイザー 二木宏造さんに聞く

まずは「外国為替市場」について説明します。世界にはたくさん国があり、国ごとに通貨が決まっています。



例えば、日本は「円」、米国は「ドル」です。海外と品物を買ったり売ったりする時は、その国の通貨が必要になります。通貨の交換の場が「外国為替市場」です。交

換する比率を「為替レート」と言います。「1ドル＝100円」というように表示されているのを、ニュースで見たことがある人もいるでしょう。例えば、米国ハワイに旅行して1個1ドルのハンバーガーを買おうとします。昨日は「1ドル＝100円」だったのに、今日は「1ドル＝130円」になっていたら、昨日より30円多く払わないと買えません。ドルに対して円の価値が下がるので「円安」となります。

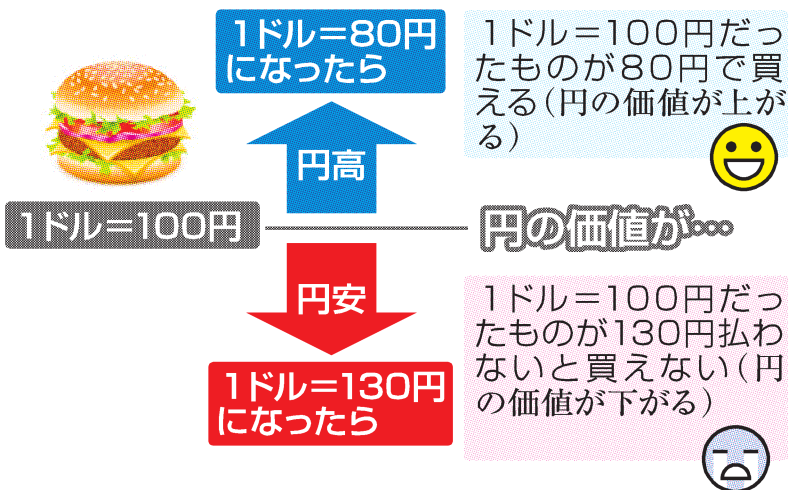
このように、外国からものを買う(輸入する)場合は、「円安」になると、お金を多く支払わなければならないくなります。つまり、輸入品の価格が上がります。日本の製品を海外に売る(輸出する)会社にとっては、円で計算すると売り上げが増えることとなります。

反対に「円高」になると、輸入品は安く買えますが、輸出品の売り上げは減ってしまいます。

円安ってなに？

※「明快マネジメント研究所」資料をもとに改変

例えば、日本人が海外旅行先のハワイでハンバーガーを買う時の為替レートを考えてみましょう



1ドル=130円になったら、100円と比べると130円の方が数字が高くなっているのですが、円の価値は下がっているため円安です。つまり、円安とは円の価値が下がることです。

輸入品値上げで家計苦しく

今年に入って円安が急激に進み、4月には約20年ぶりに1ドル130円を超えました。今月は一時135円台前半を記録しました。

為替レートは国の経済力の強さを表します。その国の経済力にみんなが期待している通貨は価値が上がり、逆の場合は価値が下がります。

新型コロナウイルス禍からワクチン普及などとともに

景気が急回復した米国では中央銀行が今春、銀行からお金を借りるときの目安になる金利の引き上げに踏み切りました。ロシアのウクライナ侵攻による原油や穀物の値上がりで物価高に拍車がかかり、利上げは続いています。

一方、景気が長年よくなり、日本はマイナス金利といわれる超低金利が続いています。このような日米の金利差拡大を背景に、投資家が金

の低い「円」を売って金利の高い「ドル」を買ってしまうと、一気に円安が進んでいきます。景気はよくないまま給料は上がらず、輸入品の価格は上がっています。円安の悪い影響の方が大きくなっているのです。

お父さんやお母さんが「パンやガソリンの値段が上がった」と困っているのも、円安が大きく影響しています。世界の経済の動きは、私たちの暮らしと直接つながっているのです。